

ヴェーダーンタ学派における王子の比喩

松 本 照 敬

ヴェーダーンタ学派において、最高我と個我との関係を例示する比喩として、「獵師の子として育てられた王子の物語」が、長く用いられた。中村元博士は、ドラヴィダの作とされるこの比喩が、『法華経』信解品における「長者窮子の比喩」と同じ構想にもとづくものであることを、つとに指摘しておられる¹⁾。シャンカラとその弟子スレーシヴァラの伝える物語は、中村博士によつて、すでに訳出検討されている²⁾。ここでは、それ以外の人物によつて伝えられる物語を和訳提示し、若干の考察を加えてみることにしたい。

I パースカラによる比喩

『ブラフマ・スートラ・パーシャ』I. 1, 3.

「また、世間において、虚妄のものに関する教えが、真実知の意味を志向しているのが見うけられる。たとえば、ある王子が盗賊どもによつてつれ去られ、ニシャーダ族の首長にわたされた。そして、彼(=王子)は、彼(=賊の首長)によつて、息子として受け入れられ、野蛮人の習俗に満足して暮していたという。それから、王の大臣がそこへやつて来て、野蛮人の種族にふさわしい習俗に(王子が)どのように(従っているの)かを観察し、後になつて、(王子が)『あなたは王子である。野蛮人の子ではない』と教えられた時、彼はすべての野蛮人の習俗を捨てて、自らの本質を理解したのである」³⁾

1) 中村元博士著『ヴェーダーンタ哲学の発展』岩波書店、1955、pp. 149-151. Cf. Hajime Nakamura, “Some notes on the *Sarvadarśanasamgraha*”, (Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens, Band XII-XIII, 1968/1969, p. 251, l. 5 f.)

2) 中村博士、前掲書、pp. 127-131.

3) *Brahmasūtra with A Commentary by Bhāskara-cārya*, ed. by V. P. Dvivedin, Chowkhambā Sanskrit Series, Nos. 70. 185, 209, Benares, 1915, p. 12, l. 23 f. “dṛśyate ca loke mithyā-viśaya upadeśas tattva-jñāna-artha-paraḥ yathā kila kaścid rāja-putras taskarair *āṇiya* niṣada-rājāya niveditas tena ca-asau putratvena pari-grhīto mleccha-ācāra-abhiratir eva-āste. taṁ rāja-mantrī tathā-āgatya mleccha-jāti-anuṣṭhānam eva-ācāraṁ *kaṁcid* anuvarṇya paścādbhūte rāja-putro’ si na mleccha-putra iti grāhite samasta-mleccha-ācāraṁ hitvā svarūpam eva pratipadyate.” van Buitenen の校訂による。原本には、イタリック体で示した *āṇiya* と *bhūte* が欠け

II ラーマヌジャによる比喩

『シュリーパーシャ』I, 1, 4. 「また、たとえば、ある王子がこどもの遊びに夢中になり、王の宮殿から出て行つて道を失い、王によつて、『(王子が) いなくなつてしまつた』と思われた。そうして、(王子は) 自分では父のことを知らず、とあるすぐれたバラモンによつて育てられ、ヴェーダやシャーストラの意味を学び、16歳の時には、すべての美德をそなえているようになつた。もしも(王子が) 『おまえの父は全世界の主である。厳肅さ、寛大さ、仁愛、しつけの良さ、勇敢さ、努力、堅固さ、剛勇さなどの徳をそなえている。(おまえの父は) 失なわれた息子であるおまえをさがし求めており、都城に住んでいる』と、ある十分に信頼しうる人によつて話される言葉を聞くならば、まさにそれと同時に、『私は、たしかに生きている者の息子である。そしてわが父は、あらゆる財に富んでいるのだ』と知つて、(王子は) この上なき喜びに満たされるのである。また王は、自分の息子が生きていて病なく、とても快い様子で、すべての知るべきことを知つてのを聞き、あらゆる人間の目的が達せられた者となる。そして、後に、その二人は一緒になるのである」⁴⁾

III アーナンダギリによる比喩

『シャーストラ・ブラカーシカー』「ある王子が、生れるとすぐに、王家から捨てられ、必然的ななりゆきとして、森に入るところとなつた。彼は、とある息子のない獵師によつて、息子として受け入れられ、その男の家で育てられ、『わたしは獵師である』と思いこんで長い時をすごしたということである。そうして、彼は、ある時、『あなたは獵師の子ではない。王子である』と信頼しうる人によ

ており、kaṃcid は kaścid となつている。(Cf. J. A. B. van Buitenen, “*Rāmānuja's Vedārthasaṃgraha*”, Poona, 1956, p. 309, l. 11 f.)

- 4) *Śrībhāṣya of Rāmānuja*, ed. by R. D. Karmarkar, Poona, 1959. Part I, p. 246, l. 5 f. “yathā ca kaścid rāja-kumāro bāla-kriḍa-sakto narendra-bhavanān niśkrānto mārḡād bhraṣṭa iti rājñā vijñātaḥ, svayam ca-ajñāta-pitṛkaḥ kenacid dvija-varyeṇa vardhito’ dhigata-veda-śāstra-arthaḥ ṣoḍaśa-varṣaḥ sarva-kalyāṇa-guṇa-ākaraḥ, tiṣṭhan, pitā te sarva-loka-adhipatiḥ, gāmbhīrya-audārya-vātsalya-sauśīlya-śaurya-vīrya-dhairya-parākrama-ādi-guṇa-gaṇa-sampannaḥ, tvām eva naṣṭaṃ putraṃ didṛkṣuḥ puravare tiṣṭhati-iti kenacid abhiyuktatamena prayuktaṃ vākyaṃ śṛṇoti cet, tadānim eva-aham tāvaj-jīvataḥ putro’ smat-pitā ca sarva-sampat-sampiddhaḥ iti niratiśaya-harṣa-samanvito bhavati, rājā ca svaputraṃ jīvantam arogam atimānohara-darśanaṃ vidita-sakala-vedyaṃ śrutvā avāpta-samasta-purṣa-artho bhavati, paścāt tav ubhau saṃgacchete ca-iti.”

つて言われ、自分が王子であることを思い出した。再び彼が、『わたしは王子である』という記憶をとりもどした時には、たとえ長く保たれていたにせよ、獵師の状態は、それに相違する記憶によつて消えうせるのである」⁵⁾

IV マーダヴァによる比喩

『サルヴァダルシャナサングラハ』第16章「また、たとえば、シャバラ族などによつて、幼児のときから(シャバラ)自身の息子たちと一緒に育てられた王子は、自分がその種族に属する者であると理解しながらも、親族らによつて、『このような性質をもつ王者たるもの、おまえはその者である』と、本質を知らされるならば、本質を得たもののごとくなる。そのように、娼婦の位置に相応する無始なる無明によつて、(自分とは)別の本性に導びかれているアートマンは、母の位置に相応する『汝はそれなり』などの天啓聖典によつて、本性に導びかれるのである。このことを三ヴェーダに長ぜる者たちが説いて曰く。――

下賤なる者どもの家にて、その息子どもと共に長く育てられた王子は、まさしく、自分をも、その種族の者なりと了解す。

プルシャは、マハット等と相応して住すれば、そのごとくなるべし。それは、自己を誤りて、楽苦の網に結ばれたりと思うなり。

されど、施与者にして、支配を専らにし、完全なる威厳を有し、悪しき者どもの懲罰者なる王者、汝はその者なり、と保護者の口より聞きて、彼はそのごとくならん。

そのごとくして、覚めしめられたる人は、王者となりて勝利のためにのみ努めん。天啓聖典により『汝はそれなり』と(の教えを)無視すれば、彼は悪しきブラフマンにのみ到達す」⁶⁾

5) *Śrīmat-sreśvara-acārya - viracitaṃ Bṛhadāraṇyaka - upaniṣad - bhāṣya - vārttikam, Ānandagiri-kṛta-śāstraprakāśikā-ākhyā-tikā-saṃvalitam*, ed. by Kāśinātha Śāstri Āgāse. 3 vols. Poona, ĀnSS. 16, p. 71, l. 20f. “kaścit kila rāja-sūnūr janma-mātreṇa tyājita-rāja-sadano nimitta-vaśāt praveśita-vipino vyādheṇa kenacid, aptreṇa putratayā grhīto grhe tasya vardhamāno' pi vyādho' smi-iti bhāvita-cetās cira-kālam ativāhayāmāse. sa ca kadācin na asi vyādha-sūnū rāja-kumāras tvam ity āptena uktaḥ sviya-rāja-sūnutvaṃ sasmāra. tasya punā rāja-putro' ham iti smṛti-prāptau cira-grhīto' pi vyādha-bhāvo virodhi-smṛtyā nivartate.”

6) *The Sarvadarśanasamgraha of Sayana-Madhava*, ed. by Vasudev Shastri Abhyankar (Government Oriental Series, No. 1), Poona, 1924. p. 465, l. 14f. “tathā ca yathā śabara-ādibhir bālyāt svasutaiḥ saha vardhito rāja-putras taj-jātyam ātmānam avagacchan, bandhubhir ya evambhūto rājā sa tvam asi- iti bodhite

V ヴィジュニャーナピクシュによる比喩

『サーンキヤ・ブラヴァチャナ・パーシヤ』4, 1. 「この点について、次の物語がある。——ある王子が、大熊 (gaṇḍarkṣa) の子によつて町からつれ去られ、あるシャバラ族の者に養育され、『わたしはシャバラ族である』と思いこんで暮していた。彼が生きているのを知つて、ある大臣が知らしめた。『あなたはシャバラ族ではない。王子である』と。彼がただちにチャンデーラ種であるとの誤認を捨てて、『わたしは王である』という真実の王の性質をあらわすように、そのように『完全な思のみのものとして顕現せる始祖 (ātipuruṣa) より生じた汝は、彼の部分なり』という慈悲深い教示によつて、(自己を)ブラクリティなりとする誤認を捨てて、『ブラフマンの息子なるがゆえに、われもまた、げにブラフマンなり。しかし、それとは異なる輪廻する者ではない』と知つて、このように自らの本質を顕す、という意味である」⁷⁾

svarūpe labdha-svarūpa iva bhavati, tathā veśyā anādy-avidyayā svabhāva-antarap nīta ātmā mātṛ-sthānīyā tat tvam asi-ityādikayā śrutyā svabhāvaṃ nīyate. etad āhus traividya-vṛddhāḥ——

nīcānāṃ vasatau tadiya-tanayaiḥ sārddhaṃ ciraṃ vardhitas taj-jātiyam avaiti rāja-tanayaḥ svātmānam apy añjasā/ saṃvāde mahad-ādibhiḥ saha vasaṃs tadvad bhavet pūrṣaḥ svātmānam sukha-duḥkha-jāla-kalitaṃ mithyā eva dhiñ-manyate// dātā bhoga-paraḥ samagra-vibhavo yaḥ śāsitaḥ duṣkṛtāṃ rājā sa tvam asi iti rakṣiṭṛ-mukhāc churtvā yathāvat sa tu/ rājī-bhūya jaya-arthaṃ eva yatate tadvat pumān bodhitaḥ śrutyā tat tvam asi-ity apāsya duritaṃ brahma eva sampadyate//”

- 7) *The Sāṃkhya-pravacana-bhāṣya*, or commentary on the exposition of the Sāṃkhya Philosophy, by Vijñānabhikṣu ed. by Richard Garbe, H. O. S. No. 2, 1895, p. 109, l. 23 f. “atra-iyam ākhyāyikā: kaścid rāja-putro gaṇḍa-rkṣa-janmanā purān niḥsāritaḥ śabareṇa kenacit poṣito’ham śabara ity abhimānyamāna āste. taṃ jivantaṃ jñātvā kaścid amātyaḥ prabodhayati. na tvaṃ śabaro rāja-putro ’si iti. sa yathā jhaṇty eva cāndāla-abhimānaṃ tyaktvā tāttvikam rāja-bhāvam eva ālambate, rājā aham asmi-iti. evam eva-ādi-puruṣāt paripūrṇa-cinmātratvena abhivyaktād utpannas tvaṃ tasya-amśa iti kārūṇika-upadeśāt prakṛty-abhimānaṃ tyaktvā brahma-putratvād aham api brahma-eva, na tu tad-vilakṣaṇaḥ saṃsārī ity evaṃ sva-svarūpaṃ eva ālambata ity arthaḥ” 本書は、“Sāṃkhya-sūtra”の注釈書であるから、王子の比喩はサーンキヤ学派にまでとり入れられたわけである。また、ヴィジュニャーナピクシュの注釈態度が Vedānta 的なものを導入しているということもできよう。なお、ātipuruṣa を説くのは、彼の特徴である。gaṇḍarkṣa がどのような動物を指すのかわからないが、仮に「大熊」と訳しておいた。

ジャンカラやスレーシヴァラの伝える比喩をも含めて、以上の物語を通観してみるに、大筋において相異はないといえよう。要するに、迷える個我が、真実の教説にふれることによつて、自己の本性に目ざめる、ということ为例示しようとしているのである。

ただ、細かな点に目を移してみると、ラーマヌジャの伝える物語が、他のそれとやや趣きを異にする面が見うけられる。

まず第一に、ほかの学者の伝える比喩においては、いずれも王子を育てたのが、獵師や盜賊など、身分の低い者とされているのに対し、ラーマヌジャの物語では、すぐれたバラモンに育てられたとしている。第二に、父王について、ほかの物語ではとくに言及されていないのに、ラーマヌジャだけは、さまざまな徳を有する王として描いている。第三に、他の物語では、王子が信頼しうる人の言葉を聞いて、自分の本性をさとるとなつていのにに対し、ラーマヌジャは、最後に王と王子が一緒になる、として物語を結んでいる。

第一点の養育者を獵師ではなくバラモンにした理由は、不明であるが、他の二点については、ラーマヌジャが自己の教義にあわせて改作したと考えるとただちに了解できる。

ラーマヌジャの教説におけるブラフマンは、あらゆる美德をそなえたナーラヤナ神である。ラーマヌジャは、比喩の中でブラフマンに相当する王が、多くの徳をそなえているとして、自説に対応させたのであろう。

また、ラーマヌジャ教説では、個我は解脱してもブラフマンと全同ではなく、あくまで本質を異にする。これは、ラーマヌジャがブラフマンを最高神と同一視するからであるが、王子が王と一緒になる、というのは、個我が解脱してブラフマンそのものになるのではなく、最高神と合一するという彼の教説に対応している。

ラーマヌジャは、古師であるタンカやドラヴィダ（ラーマヌジャ派ではドラミダ）の教説を尊重し、自説を正統説として権威づけるために、その名をあげて、自著中にしばしば引用している。ドラヴィダ作として伝えられるこの比喩を、ラーマヌジャがもしも伝えられるままの形で引用したのであれば、当然ドラヴィダの名をあげたであろう。そうしなかつたのは、かれが、自説に合致するよう手を加えたからではないだろうか。ラーマヌジャが、このように短い比喩の中にも自説を盛りこもうとした意図がうかがえることは、興味深いところである。